



Title	中世イスパニア語に於けるGerundioのPerífrasisについての若干の考察
Author(s)	中岡, 省治
Citation	大阪外国語大学学報. 1980, 48, p. 49-67
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80785
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

中世イスパニア語に於ける Gerundio の Perífrasis についての若干の考察

中 岡 省 治

NOTAS SOBRE LAS PERIFRASIS EN GERUNDIO DEL ESPAÑOL MEDIEVAL

Shoji Nakaoka

Este trabajo tiene por objeto hacer un pequeño estudio sobre las perífrasis en gerundio de sentido durativo del español medieval a la luz de los ejemplos registrados en algunas obras literarias de la época correspondiente. Dichas perífrasis van marcadas, en lo funcional, por el sentido que tienen de duración explícita frente a las formas simples que les corresponden, pero hay muchos casos en que la fusión de los dos elementos, o sea, el primer verbo y el gerundio que le sigue, no está tan completa como para transformarse en una unidad estructural, manteniendo cada uno su autonomía funcional. Esto sucede en especial con los verbos de movimiento que entran a formar parte de dichas perífrasis en lugar del auxiliar *estar*, y precisamente es éste uno de los problemas que viene preocupando a muchos gramáticos. El autor, uno de los interesados en la evolución de la lengua española, se propone buscar algún hilo de esclarecimiento del problema en los fenómenos lingüísticos de la lengua medieval, y espera que tenga alguna justificación este empeño.

1. 緒 言

本稿は、いわゆる継続相を表わすとされる文法形式、「estar {ir·venir·andar·seguir, etc.} + gerundio」が中世イスパニア語ではどのような状態にあったかを以下に挙げる文献をもとに調査し、これにつき考察を加えることを目的とする。この gerundio による迂言表現 (perífrasis en gerundio)⁽¹⁾ は、現代イスパニア語では意味機能的には当該の単純形に対し継続の意味を有するものとして有標化されている。とはいっても「estar+gerundio」の場合を除いては、文法形式としてはいまだ不安定な状態にあり、その基本とする継続の意味も *estar* に代って現われる他の助動詞⁽²⁾に固有の語彙的意味によって、大きく修正されることが多く、極端な場合には「助動詞+gerundio」としての完全な perífrasis を構成しえず、この形式の構成要素が相互に独立した働き

をなすことも珍しくない (Va cantando=Va [a algún sitio] mientras canta). そこで、以下では現代語とは異なる局面を豊富に示す中世イスパニア語に焦点を当て、これらの形式がいかなる意味機能のもとに用いられているかを考察し、これを介して、全体的な問題説明の手がかりとすべく、この作業をおこなった。

考察の対象としての資料を求めた中世イスパニア語による文学作品は次のものである。

Poema de Mio Cid (Clásicos Castellanos, No. 24; 12世紀, 叙事詩)

Crónica General de España (publicada por Ramón Menéndez Pidal, págs. 322-450; 13世紀, 歴史書)

El Conde Lucanor (Clásicos Castalia, No. 9, págs. 47-262; 14世紀, 説話集)

El Corbacho (Clásicos Castalia, No. 24; 15世紀, 講話集)

La Celestina (Clásicos Castellanos, No. 20, I; 15世紀, 戯曲)

2. この形式の動詞体系に於ける位置付け

イスパニア語動詞体系の一部をなすこれらの迂言表現、特に、その代表的な形式としての「estar+gerundio」は、相的にみれば非完了相に属している。これは、ラテン語からその動詞体系を再構成してゆく過程において、イスパニア語が動詞の単純形に対し現前化機能の「estar+gerundio」を造り上げ、前者には習慣的反覆の意味 (Oigo mal=sufro de sordera) を、後者には発話時に於ける一時的継続の意味 (estoy oyendo mal) を付与し、この機能の分化を押し進めたことによる。これと同様に、言語の表現の対象となる現実の整理の方法として、イスパニア語は動作、経過の完結を示す迂言形式「haber+ser+participio perfecto」、起動を示す形式「ir (a)+infinitivo」をも造り出した。これらはいずれも完了相に属するものであるが、「estar+gerundio」の場合と同様、特殊な共示を帯びた動詞を助動詞的に用いて、基本的、中立的な意味に修正を加えることも可能であり、この点、これら三形式間には、イスパニア語発生時より共通点がいくつか存在していることを指摘しておきたい⁽³⁾。

次に留意すべきは、現代イスパニア語では、ある特定の結合では完全に助動詞とみなされ、単一動詞と同一の構文上の単位をなす動詞句を形成する estar や ser も、本来、語源的には夫々「立っている」、「座っている」といった語彙的意味を有する本動詞であり、中世イスパニア語ではいまだこれらの意味の継承された場合が見受けられることである (a todos los sos *estar* los mandó/si non a estos cavalleros que querie de corazón, Cid 2017-18; venid acá *seer* conmigo, Campeador/en aqueste escaño quem diestes vos en don, ídem., 3114-15)。したがって中世イスパニア語に於けるこれら継続の意味を持つ gerundio の迂言形式を考察するにあたっては、estar の助動詞としての文法化がいまだ不完全であること、したがって現代イスパニア語に於けるような助動詞群とか助動詞の体系を設定するのは適当でないことを指摘しておきたい。したがって、これらの gerundio による迂言形式の成立にあっては estar も ir, venir, andar などの動詞とまったく同一

の取扱いが必要となる。即ち、Martín Alonso の現代スペイン語 gerundio 機能に関する、次のような記述が中世スペイン語の場合にも当てはまると言える。

El valor más próximo al uso latino es el adverbial. Tanto su forma simple (*amando*), como su forma perfecta o compuesta (*habiendo amado*), indican la significación del verbo con un matiz adverbial de modo: *Se acercó CALLANDO*, expresa la manera de acercarse. Con su valor continuativo forma frases adverbiales de significación durativa o progresiva: *ESTÁ trabaando*. *VA corriendo*. *VIENE estorbando*. *SIGUIÓ luchando*. *ANDA proyectando un viaie*.

「スペイン語 gerundio でラテン語の用法にもっとも近い働きは副詞的な場合である。その単純形 (*amando*) と同じく、完了形、即ち、複合形 (*habiendo amado*) もまた、動詞の意味を方法の副詞のニュアンスをこめて表示している。例えば、*Se acercó callando* (彼はだまって近づく) という場合には、近づく方を表現している。Gerundio は、その持続的意味によって、継続的または進行的意味の副詞句を形成する。例えば、*Está trabajando* (彼は仕事をしているところだ); *va corriendo* (彼は走って行っている); *Viene estorbando* (彼は邪魔をしてくれている); *Siguió luchando* (彼は戦いつづけた); *Anda proyectando un viaje* (彼はあれこれ旅行の準備をしているところだ) の場合である」⁽⁴⁾

さて、以下ではこのような考え方をもとに、個々の場合を考察してみたい。

3. Estar+gerundio

上に述べた事柄を基とすれば、この場合の *estar* は助動詞ではなく、主語となる人・物の状況、状態を意味する本動詞として位置付けねばならない。しかし、Cid をみると、*estar* は上記の versos 2017~18 の如く単独で、何らの状況補語を伴うことなく [*detenerse*・*quedarse quieto*] の意味で用いられることは僅少で、その殆んどが、場所、あるいは特殊な状況を表わす補語と共に用いられていることに気付く。特に主語が“ある場所に、あるいは特殊な状況下にある”ことを意味するのが目立って多い。これらの場合は Cid の用例を中心として次のように分類される⁽⁵⁾。

3 の 1. 主語が有生、特に人で、この主語が“依然としてある状況下に留まっている・動作を持続している”ことを示す場合。

(1) Ellos en esto estando, don avien grant pesar (Cid, 2311)

[彼らこのような立場に陥り、これを大いに嘆いていた]

(2) tornava la cabeça i estávalos catando (Cid, 2)

[彼はいく度も振り返り、残せし物々を見つめていた]

3 の 2. 主語が有生、特に人で、この主語が“ある場所に居る・居を定める”ことを意味する場合。

- (3) Ya señor glorioso, padre que en çielo estase (Cid, 330)

[おお、栄ある主よ、天にまします父よ]

- (4) de aquel rey Yúcef que en Marruecos está (Cid, 1621)

[あのモロッコに居るユーセフ王からの]

3の3. 主語が有生、特に人で、この主語が“一時的にある場所に居る”ことを意味する場合.

- (5) Mío Çid con esta ganança en Alcoçer está. (Cid, 623)

[ミオ・シッドはこれらの戦利品を手し、アルコセルに在り]

- (6) Adeliñó poral palacio do estava la cort (Cid, 2929)

[彼は宮廷のおかれたる宮殿に向かった]

- (7) Tres reyes veo de moros, derredor de mí estar (Cid, 637)

[私は三人のモーロ人の王が、私のまわりに居るのを見る]

3の4. 主語が、“特殊な状況下にある・特殊な動作をおこなっている”ことを意味する場合.

- (8) Dando grandes alaridos los que están en la çelada (Cid, 606)

[待ち伏せをしていた者たちは大音声を上げつつ]

- (9) Agora córrem las tierras que en mi enpara están (Cid, 964)

[今や彼は私の庇護下にある土地を荒らし歩く]

- (10) Todas las sus mesnadas en grant deleyt estavan (Cid, 1601)

[彼の麾下の兵士たち、大いなる喜びを味わっていた]

3の5. 地理上の名称につきその位置関係をいう場合.

- (11) desí a Molina, que es del otra part,
la tercera Teruel, que estava delant (Cid, 867-68)

[その後、反対側にある町、モリナにまで、

三番目には、前方にある町のテルエルにも (彼の力が及んだ)]

これらの諸例に現われた本動詞としての *estar* に対し、*gerundio* と組んで助動詞的に用いられる *estar* の場合を次に取り上げたい。ただ、これの前に、我々は助動詞につき簡単な概念規定をしておく必要がある。即ち、助動詞とは、直接あるいは間接的な結合関係を介し、動詞の非人称形（の全部あるいはその一部）と組み、これら非人称形の表わす動作、経過の時制、法、相など、動詞の屈折語尾の一種に対応する関係を表示する働きをするもの、となろう。形式、機能的にはこのように規定出来るが、通常は「助動詞(＋関係辞)＋動詞の非人称形」の構造となって現われ、単一動詞と同一の構造上の単位をなすものと言えよう。

さて、本論にたち帰ると、「*estar*＋*gerundio*」が単一動詞と同一の構造的単位をなすためには、動詞 *estar* の助動詞化が必要となる。この助動詞化については、歴史的には *estar* に次のような機能上の変化が発生したものと考えられている。語源的に [*estar de pie*] (立っている) の意味を有した *estar* は、この語源的な意味から場所の状況補語を頻繁に従えて用いられたが、この語源

的意味の一部 [de pie] (立って) が失なわれてゆくと共に、もっと広い意味での“場所的存在”を表わす動詞にその意味の領域を拡大した。しかし、この意味の領域の拡大により得られた“場所的位置付け”の意味は、その中に変化の可能性をもった状況”の概念をも導入することになり、これが“一時的継続”の意味をも帯びるに至ったと考えられている。この段階で、estar (時には seer) が gerundio や participio と組み迂言形式を造り上げると、ここでの意味の中心は後者に置かれることになり、この gerundio や participio の表わす継続、あるいは状態の意味と上記の新たに導入された状況的概念とが相乗作用を生じ、estar の助動詞化を促進することになったものと説明されている。これら estar に生じた意味上、機能上の変化は、部分的には Cid に記録されている諸例で確認される。しかし「estar+過去分詞」での動作の結果としての状態を意味する形式はいまだ Cid には現われず、ここでは「seer+過去分詞」の形式が使用されていることを考えると、Cid ではいまだ estar は“状態”を示す助動詞としての機能を完全には獲得していなかったとせねばならない⁽⁶⁾。

したがって、Cid では estar が gerundio と組み迂言形式をなす場合には、その基本とする“場所的存在”に加え“可変的存在・状況”の意味的要素をも併せ持つ準助動詞的存在であって、これが gerundio の形で用いられる語彙動詞の選択にも深い関係を有したものと考えたい。

以下に Cid の諸例を挙げる。

(12)=(2) tornava la cabeça i estávalos catando.

(13) Sonrrisós mio Çid, estávalos fablando. (Cid, 154)

[ミオ・シッドはほえみ、彼らに話しをしていた]

(14) los moros e las moras bendiziéndole están (Cid, 541)

[モーロ人は男も女も、彼に祝福のことばを投げかけている]

(15) pagado es mio Çid, que lo está aguardando (Cid, 1058)

[ミオ・シッドは満足し、それをじっと眺めている]

(16) Mio Çid don Rodrigo en Valençia está folgando. (Cid, 1243)

[ミオ・シッド、ロドリゴ卿、バレンシアに留まり疲れを癒している]

(17) están parando mientes al que en buen ora nasco. (Cid., 2218)

[彼らは、よき時に生を受けし人のことを考えている]

seer (<sedere) が estar に代って用いられることもあった。

(18) Raquel e Vidas seiense consejando. (Cid, 122)

[ラッケルとビダスは相談を交していた]

(19) el rey don Alfonso seíse santiguando (Cid, 1840)

[アルフォンソ王は十字を切っていた]

(20) a la puerta de la eclesia sediellos sperando (Cid, 2239)

[彼は教会の入口に留まり、彼らを待っていた]

これらの場合の他に, lo están esperando (1746), los están llamando (2305), estava adelant catando (2439), catando están (3123); sedíense sonriendo (2532), alabándose sedían (2824), catándole sedíe (2059), sedielos castigando (3553) などが抽出される。

ここに挙げた諸例を観察して明らかになることは, gerundio として用いられている語彙動詞にひとつの共通性が認められることである。即ち, ここに用いられた動詞は状態動詞かあるいは動作動詞でも, その動作成立の要件としては“場所の移動”の概念を必要としない類のもの, 即ち, ここから, 動作主が静止した状態でその動作をおこなうことが可能な動作をいうものであるとも言えよう。この estar の共起上の制限は estar の基本的な意味の反映として興味深い現象であり, この形式「estar + gerundio」の発生段階に関し, 次のような仮説を設定することが可能となる。

即ち, これまでに述べた estar の語源的あるいは基本的意味から, この形式発生の第一段階として, 次の意味の構造を予想させる。

I. estar[+場所的位置付け]+gerundio⁽⁷⁾

—————動作者またはある状態にある者

(21) Que unos están en casa folgando e vieneles... (Corbacho, 218)

[ある人たちが家にいて, 休んでいて, ふと…という気になると]

(22)=(16) Mio Çid don Rodrigo en Valençia está folgando

(23) ca él allí estava esperando (Lucanor, 59)

[というのは彼はそこに居て, 待っていたからである]

(22), (23) の場合は場所の状況補語の機能につき曖昧さが生じる。即ち (22) では está en Valençia folgando か, あるいは está folgando en Valençia なのかの問題が生ずるが, ここでは歴史的な観点から estar に本動詞としての意味を与えておきたい⁽⁸⁾。つまり場所の状況補語は二つの動詞の要素のうち, 場所的意味を強くもつ estar とより緊密に結び付くと予想するのである。これが次の段階ではその場所的存在の意味が拡大され, 時を始め, 他の概念的な状況性にも言及することにもなる⁽⁹⁾。したがって, I の意味の構造に拡張が生じ, 次の枠組みが成立する。

II. estar[+時間・概念的的位置付け]+gerundio⁽¹⁰⁾

[(場所的位置付け)]

—————動作者またはある状態にある者

これは以下のような場合である。

(24) Estava en tal guisa su ventura reptando (Apolonio, 121A)

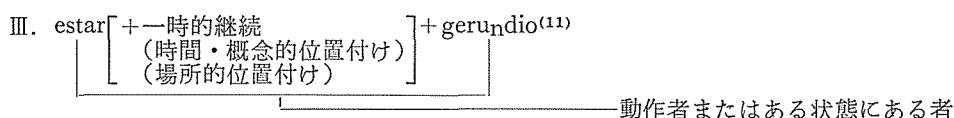
[彼はそのような様子で, 己の運命のことを考えていた]

(25) Todo el día e toda la noche están regañando,

dando maldiciones a quien los syrve (Corbacho, 202)

[昼も夜も一日中, 彼らはその仕える人に悪態をつき, 叱りつけている]

これら一般的状況性は前述の如く, *estar en uno* (*en yda, en gran deleite, a grant sabor*) のような具体的な場合から, *assí estando* (Cid, 2032), *en esto estando* (Cid, 2311) のようにかなりの抽象性を帯びる場合まで, その幅は広い. 特に後者の場合は, 文の表に状況性を示す補語を用いずとも, *estar* そのものの表わしうる意味の中にこの状況性がくみ込まれてしまうこともあるのは容易に予想される. このような観点から *estar* が意識され始めると, *estar* はより抽象化し, “状況の一時的継続” の概念を表わすのみの準助動詞として, その働きを限定してしまう. これが助動詞化の第一段階となるのであろう. これを次のように図示しよう.



したがって, この形式がⅢの段階にいたるまでは, *gerundio* として用いられる語彙動詞には, 上述のような意味的な制限が存在するが, ここではこの制限が緩和され, 動作と具体的な場所との関係は必要でなくなってしまう. 勿論のこと, いずれの場合にも“移動”を意味する動作動詞が *estar* と組む場合は調査した文献中には存在しない⁽¹²⁾.

(26) *maguer los están llamando, ninguno non responde* (Cid, 2305)

[皆は彼らを呼べども, 誰一人答える者なし]

(27) *Estando él sufriendo este dolor et teniendo el físico el figado en la mano...*

[彼がこの痛みを耐え忍び, 医者が彼の肝臓を手を持っていた時に] (Lucanor, 86)

(28) *sus cejas abaxadas como de persona que está comiendo*

en algund grand pensamiento (Corbacho, 252)

[彼のまゆは, 何か重大なことを考えている人のように垂れ下がっていた]

またすでに例として示したが, 中世スペイン語では形式「*estar*+*gerundio*」の *estar* に代えて *seer* (<*sedere*) が用いられることもあった. しかしこの「*seer*+*gerundio*」の形はあまり発達しなかった模様で, Cid や *Libro de Apolonio* (*souiese assechando*, 374 c; *souiese orando*, 374 d) には見られるが, すでに *El Conde Lucanor* には現われてはいない. これは *seer* の持つ静的な意味が, *gerundio* の表わす継続性となじまなかったことに起因するのであろう.

この次の段階では *estar* に“状態”の意味が付加される場合に言及しておかねばならない. この *estar* の“状態”の助動詞としての働きは, *gerundio* と組む場合よりも, むしろ完了相の動詞の過去分詞と組んで動作の結果を表わす形式から生じたと普通説明されているが⁽¹³⁾, Cid ではこの形式はいまだ存在せず, 次例のように *ser* が用いられている.

(29) *Ya vedes que entra la noch, el Çid es pressurado* (Cid, 137)

[ごらんの通り日も暮れ, シッドは急いでいる]

(30) *mucho era pagado del sueño que soñado a* (Cid, 412)

[彼は見たばかりの夢に大いに喜んでいた]

したがって、estar が上記の様な場合に用いられなかったという事実は、この動詞が“状態”の意味を未だ保持していなかったこと、また繫辞動詞として形容詞と共に用いられなかったことへの理由付けともなるもので、この estar が“状態”の意味を確実に示すのは Crónica General を待たねばならないと言われている⁽¹⁴⁾。

さて、上記の観察をもとに、「estar+gerundio」に関して次のようなまとめをおこなっておきたい。調査の対象とした中世イスパニア語のテキストでは estar が未だ完全に助動詞化せず、本動詞としてこの基本的な意味 (hallarse en un lugar) を留めていると考えていい場合が多く、ここから、この estar と組んで gerundio で現れる語彙動詞は、明らかに場所の移動をその意味成立の必要条件とするもの（例えば correr [走る]）であってはならないとの制限が生れてくる。またこれらの語彙動詞は人の状態をいう状態動詞か、あるいは動作主を人とする明示的な動作の動詞であり、行為能力を欠いた無生の主語と共起している場合はない。こう考えると、中世イスパニア語では文法形式としての「estar+gerundio」は、いまだ不安定な状態にあり、«hallarse/en un lugar+(en alguna otra circunstancia)/haciendo algo» を基本的意味とする構造であったと見做すのが適当であろう。

以下に夫々の文献に現われる場合を挙げておこう⁽¹⁵⁾。

Cid: (2), (154), (541), (1058), (1243), (1746), (2218), (2305), (2439), (3123) / (122), (1840), (2059), (2239), (2532), (2824), (3553)

Crónica General: (342), (350), (359), (400), (401), (405), (420), (421), (421)

Conde Lucanor: (54), (59), (86), (91), (92), (94), (95), (104), (115), (117), (118), (125), (129), (129), (155), (180), (184), (204), (207), (214), (216), (255), (256)

Corbacho: (94), (100), (104), (109), (114), (123), (154), (169), (169), (169), (198), (198), (202), (202), (202), (218), (252), (256)

Celestina: (10), (31), (40), (92), (123), (190), (203), (210), (211), (212), (251).

4. Ir+gerundio

この形式は「estar+gerundio」と並んで中世語にも頻繁に現われるが、現代語に比べ、estar 以上に助動詞としての文法化の程度が高く、したがってこの形式の表わす関係も、それだけ複雑である。

動詞 ir は“空間の一点から他の点への移動”を基本的な意味とするが、すでにこの意味 [pasar de un lugar a otro] で、その移動の終着点やこの移動の経過する場所を示す状況補語と共に Cid でも用いられている。

(31) Los mandados son idos a las partes todas. (Cid, 956)

[これらの知らせは、ありとあらゆる場所にとどいた]

- (32) Vayamos pora Carrión, aquí mucho detardamos. (Cid, 2540)

[我々はカリオンに帰ることにしよう、ここでは長居をしすぎたのだ]

- (33) Mientra que fóremos por sus tierras conducho nos mandó dar. (Cid, 1409)

[我々が彼の領地に行く間は、我々に食糧を与えるよう命ぜられた]

さて、この「ir+gerundio」も発生的には、本動詞としての ir に様態の副詞としての gerundio が付加された構造から発達したものと考えられる。

- (34) et yendo el por el palacio saludando a todos, nol respodie ninguno… (Crónica, 350)

[そして、彼は皆に会釈をしつつ宮殿を行ったが、誰一人彼に答礼しなかった]

- (35) Ca en alcaz sin dubda les fueron dando. (Cid, 786)

[彼らはモロー人を、息もつかせず追跡して行った]

- (36) et mataronle con muchos daquellos que con ell yuan fuyendo (Crónica, 355)

[彼らは、彼と共に逃げて行った者たちの多くの者共々、彼を殺害した]

- (37) yuas' contra la tyenda d' Almozor acostando. (F. González, 264 B)

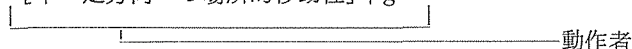
[彼はアルモソールの陣屋に近ずいて行った]

- (38) oyo com a Cast(y)ella moros yuan corriendo. (F. González, 178 B)

[彼は、モロー人がカスティーリアを荒しているさまを聞き知った]

上記4例にあっては、gerundio で用いられる語彙動詞が実際に場所の移動をその意味成立のための必要条件とする場合であるが、これは、ir が完全に動詞としての意味を保持したため、gerundio となる動詞の要素にも場所的移動の概念を要求したのであろう。これに加え、もし gerundio として用いられる動詞に本来この意味が存在しない場合には、これが具体的に状況補語によって付加されている場合が多い。勿論のこと、ここでは動作者としての有生の主語が要求される。これらの関係は次の様に図示出来よう。

I. ir[+一定方向への場所的移動性]+gerundio



但し、この場所的移動性を示す状況補語が、文構造のうえで ir に属するか、あるいは gerundio に属するか、曖昧な場合が生じることもある。

- (39) Por Castiella odiendo van los pregones (Cid, 287)

[カスティーリに広くこのお触れは伝わってゆく]

これら、具体的に場所的移動を示す動詞の gerundio との組合せは、Cid では他に次のような場合、即ち、va llegando (262); comos van allegando (791); yas ivan partiendo (2262) のような場合があり、動作主としての有生の主語を伴っている。また、主語にこの移動性が予想される場合には無生の名詞であってもこの形式に現われてくる。

- (40) Passando va la noch, viniendo la man. (Cid, 323)

[夜が過ぎゆき、朝が到来せんとしている]

- (41) sonando van sus nuevas todas a todas partes (Cid, 1206)

[彼の戦果のほどこれすべて、いたる所に鳴り響いてゆく]

したがって、これら諸例に見られるように、具体的な場所的移動性が gerundio として用いられた動詞の語彙的意味から、あるいは他の手段によって与えられる場合には、表面的には「ir+gerundio」の形を示しても、これら gerundio がその意味的特徴から ir に影響を及ぼし、この意味、機能を修正しうる程の働きを示さないがため、いまだ「ir+gerundio」は単一動詞とまったく同じ構造上の単位をなすとは言えない場合となる。しかし、Cid など諸文献に表われた諸例をみると、これまでに述べた場合と相違するケースも存在する。特に gerundio が実際の場所的移動を意味しない動詞の場合である。この関係は次のような枠組によって表わすことにする。

II. ir [+時間・概念的移動性
[(一定方向への場所的移動性)]] +gerundio
動作者または経験者

- (42) comiendo va el comde. ¡Dios, qué de buen grado! (Cid, 1052)

[かの伯爵は食べ始めたが、驚くなかれ、その様子のすざましきこと]

- (43) el amor de mio Çid ya lo ivan provando. (Cid, 1247)

[彼らは、ミオ・シッドの暖かい心に気付き始めた]

- (44) valas conortando e metiendo coraçón. (Cid, 2804)

[彼は彼女たちをはげまし、元気付けてゆく]

- (45) Quando esto oyó el comde, yas iva alegrando. (Cid, 1036)

[このことを聞いた時、伯爵は喜びを覚え始めた]

- (46) Quando yua el moço las cosas entendiendo (F. González, 178 a)

[この若者が物事の分別がつき出した時に]

- (47) Fue cobrando el seso, de color meiorando. (Apolonio, 187c)

[彼は意識をとりもどし、顔色もよくなっていった]

明らかにこれらの場合には、場所的移動の意味が時間的、概念的移動の意味に置き換えられているが、これは ir 自体に生ずる空間的な意味の構成単位の時間的領域への変化の結果に起因すると共に、gerundio として用いられた語彙動詞の意味も大きく ir の機能の変化に影響を及ぼしたものと考へたい。尚、この段階では gerundio は動作主としての有生の主語を伴う純粹の動作の動詞の場合から、ある事柄の発生、経過を経験している経験者の場合にも及んでいる。この後者の意味の強調の結果であろうか、第三段階では ir の動作性がまったく稀薄となって、「ir+gerundio」の組合せが有生の動作主を必要としない場合も生じてくる。

III. ir⁺

一定方向への推移性 (時間・概念的移動性) (一定方向への場所的移動性)
--

+gerundio

経験者

- (48) ya les va pesando a ifantes de Carrión (Cid, 2985)
[この事態を見、カリオンの王子たちは悲しみを覚え始めた]
- (49) Yal creçe la barba e vale allongando. (Cid, 1238)
[彼にはあごひげがのび始め、これが長くなりつつある]
- (50) las coplas de este cantar aquí van acabando. (Cid, 2276)
[この段の歌の語りは、ここで終りになってゆく]
- (51) Veye que se le yua su cosa mal parando. (Apolonio, 79 b)
[彼は、自分の企てがまずい結果に向かっていることを知っていた]
- (52) Semeiole que le yva amansando la dolor. (Apolonio, 186 b)
[彼にはその苦痛が治まってゆくように思えた]
- (53) et assí yrá yendo el pleito fasta que non vos finque
cosa en el mundo. (Lucanor, 102)
[かくして事が進みゆき、あなたにはこの世に何も残らなくなってしまうでしょう]

この6例では、経過が夫々の方向に向かい推移していることが意味の中心となっている。またこれら諸例の文法上の主語には動作主としての特徴はなく、また ir には「行く」という空間移動の具体的な意味も見られず、漸進的変化、推移を意味する動詞の gerundio と組んで、これら変化、推移の意味を積極的に表わす働きをするに止まるといえよう。すでに上記Ⅱの場合にもこれらの推移性はうかがえるが、主語の意味的特徴によって、この推移性の内容に区分を設けた。

さて、これら推移性、即ち漸進的変化、進行にはいくつかの段階があるが、すでに Cid を始め他の文献では、大別して推移が始まる開始の段階とそれに次ぐ漸進的変化の進行段階の二つの場合を読み取ることが出来ると思う。これは助動詞的に用いられる ir の行為態様を反映するものである。即ち、「行く」という動作はその動作開始の段階と、それに次ぐ移行の段階とが動作成立のうえで必要な条件となるがため、これらの意味の単位が維持され、「ir+gerundio」を特徴付ける意味となったのであろう。

この二つの意味のうち、起動的な意味はこの perifrasis で頻繁に見られる起動的な意味をもった語彙動詞との組み合わせによるか、あるいは他の語彙的手段、特に副詞などの添加によって表わされるのが普通である。

- (54) el castiello de Alcoçer en paria va entrando. (Cid, 569)
[アルコセルの城は貢物の献納をおこない始めた]
- (55) otro omne muy más poderoso que nós entramos va comenzando algunas cosas... (Lucanor, 87)

- [私たち二人よりももっと力のある人が、一人いくつかのことをし始めた]
 (56)=(45) Quando esto oyo el comde, yas yva alegrando.
 (57) Desde que me fui faziendo vieja, no sé mejor oficio a la mesa que escanciar.
 (Celestina, 109)

- [私が年をとり始めてからというのは、酌婦ほどの楽な給仕業を知らない]
 またこの形式が命令形で用いられると、起動的意味が強く現われる。
 (58) Amigo, ¿cóm' estades? yd perdiendo cuydado.
 (Hita, 868 b)

[友よ、如何なさっていますか、心配はされぬことです]
 これに次ぐ漸進的変化、進行の段階も、動詞の語彙的意味や関連の意味を有する副詞、接続詞によって顕示化されることが多い。つまり、上述の ir の「行く」という動作の、ある方向に向かって線状に移動するという意味の側面が強く意識された結果、特に、推移、増減などの意味を表わす動詞の gerundio と組み、漸進的移行、展開を示すのに最適の形式となったと考えられるが(上例, 48~53), すでに、動作動詞のみではなく、状態動詞もこの組合せに現われてくる。

- (59) Don Carnal, el doliente, yua salud avjendo
 (Hita, 1180 b)
 [病に伏せしカルナル師は健康を回復していった]
 またこの漸進的移行、展開を具体的に意味する場合としては、すでに poco a poco, de día en día などが用いられている。

- (60) e de dya en día (el juyzio) se va decayendo fasta venir a la muerte (Corbacho, 111)
 [日々(判断力)が衰えてゆき、ついには死に至るのだ]

またここで、この「ir+gerundio」の特徴的意味として、起動と進行とを挙げたが、この両者は判然と区分出来る二つの意味の領域ではなく、常にこの二つが重なって表われてくると見做すのが適当であって、特にいずれか一方を顕示的に表現しようとする時に、上記のような副詞や、時には接続詞が使用されるのであろう。

また、「ir+gerundio」は単に動作の持続のみをいう場合があるとして、この perifrasis の特徴的意味の一つにこの持続性を数え上げる考え方もあるが、そこに挙げられた諸例を検討すると、この持続性といった意味も、上記の漸進的移行の意味の一部として解釈するのが妥当と考える⁽¹⁶⁾。

最後に、Cid と Crónica (調査範囲内での) とではこの perifrasis の使用頻度数が高く、「estar+gerundio」の場合よりも多用されている。後者の継続そのものに言及する中立的な意味に対し、ir の表わす直線的運動性を基調とする動作の継続の表出が好まれた結果であろうが、他のテキストではやはり使用頻度数の点からみれば、「estar+gerundio」が優勢である。以下に夫々の場合を挙げておこう。

- Cid: (262), (287), (323), (377), (396), (403), (568), (569), (607), (747), (759), (786), (791), (936), (937), (940), (943), (967), (1006), (1036), (1046), (1051), (1057), (1079), (1096), (1154), (1156), (1200), (1206), (1238), (1247), (1256), (1385), (1513-14), (1670), (1826), (1837), (2220),

(2229), (2262), (2276), (2344), (2419), (2429), (2455), (2535), (2675), (2687), (2757), (2763), (2783), (2790), (2804), (2871), (2887), (2896), (2983), (2985), (3163), (3187), (3568), (3603).

Crónica General: (324), (325), (332), (335), (353), (355), (360), (360), (363), (373), (388), (395), (398), (399), (404), (415), (417), (423).

Conde Lucanor: (84), (87), (89), (89), (95), (101), (102), (103), (124), (124), (131), (131), (133), (182), (238), (246), (257), (258).

Corbacho: (82), (108), (111), (145), (157), (161), (166), (190).

Celastina: (132), (161), (193), (216), (234).

5. Venir+gerundio

その基本的な語彙的意味を [caminar donde está el que habla] とする venir は, ir との意味上の関連から, 上述の「ir+gerundio」の場合と同程度の使用頻度数を期待出来るが, 事實は, 中世イスパニア語での使用頻度は極端に低く, 例えば Cid ではこの形式は記録されていない。但し, 単独では上記の基本的意味で用いられている。

(61) los de Borriana luego vengán acá (Cid, 1110)

[ボリアナの者たちここに召し連れよ]

(62) viniésssem a vistas si oviesse dent sabor (Cid, 1899 b)

[もしそう望むのなら, 彼が私に会いに来るのもよからう]

しかし, これと同時に“話者(のいる場所)”とはまったく無関係の場所への移行を示す場合もいくつかみられる。

(63) miedo han que i verná mio Çid el Campeador. (Cid, 2987)

[皆は, 戦士ミオ・シッドがそこに行くのではないかと恐れている]

この (63) の verná は完全に irá と混同して用いられていると思える。この用例などからも推定出来ることだが, 動作の移動の方向, 方法などについては両動詞には共通性が多く見られたがため, 中世イスパニア語では「ir+gerundio」が, 近代語の「venir+gerundio」の意味する関係表示にも拡大使用出来たと考えたい。これと共に, venir の意味的特徴のひとつである動作の終結に向っての動きと gerundio の示す継続の意味とが結び付きにくかったということも, この形式が「ir+gerundio」ほど発達しなかったことへの一因にもなろう。特に調査した文献中での用例をみると, 「ir+gerundio」のⅢに該当すると思える場合は存在しない。

(64) Et vinien dando tan grandes voces … et faziendo tan grand royo. (Crónica, 349)

[そして, 彼らは大音声をあげ…, また大音響をたてて進んできた]

(65) e para que asý sea ya vienen allegando los tiempos. (Corbacho, 224)

[そして, それが現実とならんがための時が近づきつつある]

(66) Lo que vengo diziendo, madre mía, es que yo no me maravillo. (Celestina, 198)

[私がこれまで言ってきたことは, おお母よ, 私は何も驚かないということなのです]

特に、(65)では、この形式が既に無生の主語とも共起しているが、これはここに用いられた動詞 *venir* が助動詞化し始めたことを表わしていると解釈出来るだろう。但し、調査した文献にあつての使用頻度数はきわめて低く、そのうえに、この形式が発話時（あるいは過去の一時点）より一段階前に位置する時間の単位内から発話時（あるいは過去の一定点）に向って徐々に、持続的に進行してくる動作、経過を意味するのに用いられるようになったのは16世紀の後半であると考えられるので⁽¹⁷⁾、*estar*, *ir*, *andar* が *gerundio* と組む場合と比べて、「*venir*+*gerundio*」の文法形式としての固定化がなお一層不十分であったと結論出来るよう。

ただし、調査した範囲内では「*ir*+*gerundio*」の I, II の段階に完全に対応するような用例は僅少であるが、*et vino muy ascondidamente, cuydándolo tomar* (Lucanor, 100) のような文構造はかなり多く存在することを付け加えておきたい。

なお、この形式は次の場合に現われてきている。

Cid: 用例なし。

Crónica General: (353), (392), (394), (394).

Conde Lucanor: (216), (219), (223).

Corbacho: (224), (264).

Celestina: (158), (195), (196), (198), (198), (240).

6. Andar+gerundio

Andar はその基本の語彙的意味を [*moverse de un lugar a otro dando pasos*] とするが特に、同種の運動の動詞の *ir* と *venir* が一定の方向性を示し、直線的移行をいうのに対し、*andar* は動作の方向性については無標であり、したがって方向性、推移性といった意味とも関係しない。むしろ、この *andar* では運動の発生する場所の不定性が強調されることが多く、これが *gerundio* と組んで *perífrasis* を構成する場合の特徴的意味として広く指摘されてきている⁽¹⁸⁾。

Cid ではすでに「歩く」の意味で用いられている。

(67) *Dezildes que prendan el rastro e pienssen de andar.* (Cid, 389)

[彼らには、足跡をたどり、歩みくるようお伝え下さい]

(68) *andarán* *mios porteros por todo el reino mío* (Cid, 2962)

[私の使者は我が王国をくまなく歩みゆくことになるう]

また、Cid には記録されていないが、その他のテキストには次のような用例も存在する。

(69) *andudieron* *por muchas tierras, buscando logar para poblar...* (Crónica, 6)

[彼らは住むべき場所を捜し求めて、多くの土地を歩いた]

(70) *que andudiesse* *por la villa pregonando en guisa que lo oyessen todos.* (Lucanor, 215)

[皆がこれを聞けるよう、町中を触れて歩くようにと]

上記4例からも明らかとなる *andar* の基本的意味が、*estar*, *ir*, *venir* などの場合と同様、ge-

(71) que curian a Valença e andan arrobando (Cid, 1261 b)
[バレンシアを守り、警備して歩いている(我が家来たち)]

(72) Las provezas de mio Çid andávalas demandando. (Cid. 1292)
[彼はミオ・シッドの武勲を捜し求めて歩いていた]

(73) Et quando vio que el conde Fernand Gonçalez le anda buscando (Crónica, 399)
[そして、彼が、フェルナン・ゴンサレス伯が彼を捜し歩いていると知った時に]

これらの諸例を基にすると、この「andar+gerundio」の発生をうながす第一段階としては次の意味の構造を想定したい。

動作者

これに続いて次の諸例を問題としたい。これは、andar が具体的な動作を意味するが、場所の移動とは必然的関係のない動詞の gerundio と組む場合である。

- これら4例では、gerundioとして用いられている動詞の語彙的意味の影響をも受けた結果であろう。andarはその本来の意味の領域を拡大して、場所のみならず時間的狀況性にも言及して

いると考えられる。具体的には(76), (77)に明らかなように“de aquí para allá”(あちらこちらへと)から“en distintas ocasiones”(何回ともなく)といった動作の展開するこの状況の多様化である。とはいっても上記の場合に挙げた場所的移動の意味が完全に後退したわけではないので、第Ⅱ段階としては次の意味的な枠組を予想出来よう。

Ⅱ. andar⁺+時間・概念的移動性
(不特定方向への場所的移動性)⁺gerundio
—————動作者

しかし、この形式では調査した文献中には Anda dudando/Anda leyendo amena literatura のように場所の移動とは無関係の動作、活動を意味する場合がないので、中世イスパニア語での andar の助動詞としてこの文法化もまた不完全なものと思わざるをえない。この andar の助動詞としてこの文法化の諸例は16世紀後半から17世紀にかけて頻繁に現われてくる⁽¹⁹⁾。したがって「andar+gerundio」の場合、その意味は上記のⅡの段階にとどめておくのが妥当であると考ええる。

以下に夫々の文献中に現れた場合を挙げておく。

Cid: (1261), (1292)

Crónica General: (338), (339), (351), (355), (365), (368), (371), (379), (397), (399), (402), (403), (404), (415), (424).

Conde Lucanor: (59), (81), (131), (132), (210), (249) (249), (259), (294).

Corbacho: (85), (106), (224), (246).

Celestina: (163), (205).

7. Quedar+gerundio

この形式の使用頻度数は、これまで取り上げたものに比べてはるかに低く、用例抽出のために参照した諸文献においても次の例を見出すのみである。この場合にも「(ある場所に)留まる・居残る」という本動詞としての意味が完全に保持されている。

(78) e el otro quedó desangrándose, e así se le llevaron de allá. (Corbacho, 95)

[こうして、その男の方は血を流しつつその場に残り、後にそんな様子のまま、その場から連れ出された]

(79) Los ojos faza tierra non queda sospirando. (Hita, 833 b)

[目を伏せて、彼はじっと動かず、ため息ばかりついている]

(80) Queda Calixto hablando con Sempronio. (Celestina, 113)

[カリストは残ってセンプロニオと話しをしている]

このように、この形式が未発達であるのは、中世イスパニア語では estar の助動詞化が不完全で、「estar+gerundio」によって場所的存在、時間的持続が表わしえたがため、^{*}ある場に居残っ

て…する”という特殊な意味的強調が必要な場合にのみ、この形式の使用が限定された結果であろう。この特徴は現代語にも引継きみられ、この形式では“ある場所への残留”の意味が支配的となっている。なお、中世語の特徴として、quedar と類似した意味を持つ fincar, ficar; yacer がこれに代って用いられる場合が調査した文献では僅少なながら存在している⁽²⁰⁾。

8. Seguir+gerundio

この形式も調査した文献には現われていないが、現代語では使用頻度数の高いものなのでこの結果は実に意外である。しかし、Cid では seguir の動詞としての用例がないこと、また、単独では動詞として用いられても、gerundio と組んで持続を表わしうるような意味 (proseguir o continuar en les empezado) を未だ示していないことなどが、中世イスパニア語でのこの形式の欠落を説明することになる。なお、この seguir に代る continuar, proseguir に関しても用例は見出せなかった。歴史的に見て、この形式が固定した状態となるのは18世紀であると考えられている⁽²¹⁾。

9. 結 語

さて、ここで上述の事柄をまとめ一応の結論としておきたい。冒頭に挙げたように、これらの非完了相に属し、継続、進行、持続などの行為態様を表わすとされる形式も、基本的には「本動詞+副詞的機能の gerundio」をその発生の第一段階とすると考えられるが、中世イスパニア語は実にこの状態を顕著に示している。例えば、近代語、現代語の移行のなかで助動詞として完全に文法化した estar が、いまだ本動詞としての意味を維持し、かなり厳密な選択上の制限を gerundio として現われる動詞に加えていることである。従って、「estar+gerundio」の場合には、いまだ動作者、特定の状態にある者、経験者としての有生、特に人間の主語が現れる文構造に限られる点にも estar の助動詞化の不完全さが読みとれる。この estar に代って用いられる運動の動詞の場合にも、夫々が本動詞としての意味を依然として維持し gerundio として用いられる動詞の選択に夫々の特徴を示している。但し、ir の場合には使用頻度数が estar よりも高くなる文献があり、機能的にも、「estar+gerundio」よりもなお幅の広い関係を表現しうる形式であったと考えられる。また、これら本動詞の助動詞化には、夫々に共通する移行の段階として、個々の動詞の意味の構成単位としての「場所的指示」から「時間的・概念的指示」へと意味上の転移が発生し、これに次いでこれらの動詞がより抽象化への傾向を示し、形式化し、これと共に意味形成のうえで重点が gerundio に移行してゆく過程を想定した。この移行の過程は、状況性の表示の有無、gerundio として現れる動詞との共起制限の変化など、むづかしい問題を提起することになるが、これら動詞の助動詞化を考える際には避けて通ることの出来ない問題でもある。

最後に、中世イスパニア語の動詞体系をみると、ここに取り上げた gerundio 構文に対をなすものとして、「estar {ir·venir·andar...etc.} + participio pasado」があり、ここにも estar を始め

とする諸動詞の助動詞化の問題が提起されてくる。本稿ではこの二種の形式の比較をおこなわなかったが、次の機会にはこの比較検討を通じてここに用いられる諸動詞の助動詞としての文法化の問題を考えてみたいと思う。

[1979年9月]

註記

- 1) ここでいう *Perífrasis* とは厳密な意味での「助動詞の助けを借りて成立する活用で」、即ち *Perífrasis gramatical* (= la que procede de la falta de una voz única para expresar un concepto único. Las más importantes, dentro de este tipo, son las perífrasis verbales o conjugaciones perifrásticas, en las que se unen un verbo auxiliar y el infinitivo, el gerundio o el participio del verbo auxiliado; F. Lázaro Carreter, *Diccionario de términos filológicos*, Gredos, 1973) ではなく、表面上、「estar {ir · venir · andar · seguir, etc.} + gerundio」として現われる場合すべてを観察の対象とした。
- 2) この場合、助動詞として、あるいはそれに近い機能を果すものとしてどのような動詞を取上げるべきかについては、Amado Alonso, *Estudios lingüísticos, temas españoles; Sobre métodos*, Madrid, 1961; Eugenio Coseriu, *Sobre las llamadas “construcciones con verbos de movimiento”: un problema hispánico*, Montevideo, 1960, Bernard Pottier, *Sobre el concepto de verbo auxiliar*, México, 1961; C. H. Stevenson, *The Spanish language today*, 11, *The tense-aspect* (págs. 58-63), London, 1970 などが有益な指針を与えてくれる。
- 3) Jean Bouzet, *Orígenes del empleo de “estar”, ensayo de sintaxis histórica, estudios dedicados a Menéndez Pidal* (tomo IV), Madrid, 1953, pág. 44; Bassols de Climent, *Sintaxis histórica de la lengua latina* (tomo II, 1), Barcelona, 1948, págs. 193-200.
- 4) Martín Alonso, *Gramática del español contemporáneo*, Madrid, 1968, pág. 153.
- 5) この *estar* の意味上の分類では、上記 J. Bouzet (*Orígenes...*); R. Menéndez Pidal, *Cantar de Mio Cid*, texto, gramática y vocabulario, III (vocabulario) 中の *estar* の項を参照した。
- 6) J. Roca Pons, *Estudios sobre perífrasis verbales del español*, Madrid, 1958, pág. 218 y sigs.
- 7) この意味の構造において、[+場所的位置付け] は、この構造に本来的なものとして付与された状況的意味の特徴であるが、表面への具体的表示は任意であることを示す。また、この構造は、動作者、あるいは、ある状態にある者を表わす名詞を伴うものと考ええる。
- 8) Jean Bouzet, *Op. cit.*, pág. 45; J. Roca Pons, *Op. cit.*, pág. 219.
- 9) Jean Bouzet, *Op. cit.*, págs. 44-48.
- 10) この意味の構造において、(場所的位置付け) は、第一義的な状況的意味の特徴ではなく、潜在的な場にあることを示す。その上部のもの、即ち [+時間・概念的的位置付け] を第一義的な意味の特徴とするが、これらの表面への具体的表出は任意とする。
- 11) この構造における夫々の要素には、I, II の場合と同様の解釈を当てはめる。従って、ここでは[+一時的継続]をもって、この構造の特徴的意味を示すことにする。なお、以下 *ir*, *andar* の場合にも同様の解釈の方法を適用したい。
- 12) 例えば, *Está paseando/caminando/corriendo/viajando* などの場合をいう。
- 13) Jean Bouzet, *Op. cit.*, págs. 47-49.
- 14) J. Roca Pons, *Op. cit.*, pág. 248.
- 15) () の数字は韻文の場合は verso 番号, 散文の場合はテキストの頁数を示す。
- 16) Robert K. Spaulding, *History and syntax of the progressive constructions in Spanish*, Berkeley, 1926,

- pág. 251; A. Yllera Fernández, *Estudios sobre perífrasis verbales en el español del siglo XV*, Madrid, 1971, pág. 9.
- 17) Robert K. Spaulding, *Op. cit.*, pág. 260; A. Yllera Fernández, *Op. cit.*, págs. 9-10.
 - 18) Amado Alonso, *Op. cit.*; J. Roca Pons, *Sobre el valor auxiliar y copulativo del verbo “andar”*, Oviedo, 1954; Vox, *Diccionario gen. ilustr. de la lengua española*, Barcelona, 1973, artículo “andar”.
 - 19) これは上記 R. K. Spaulding の論文に挙げられている諸例 (págs. 258-59) を検討しての結論である。なおセルバンテスには “...porque no ande vacilando mi honra en vuestras intenciones..., os habré de decir lo que quisiera callar, si pudiera.” (*El Quijote*, I, Cap. XXVIII) という類の用例がある。
 - 20) Robert K. Spaulding, *Op. cit.*, pág. 248, nota.
 - 21) Robert K. Spaulding, *Op. cit.*, pág. 262; なお、調査の対象とした文献のうち、Corbacho (pág. 87) に “...el que deshonesto amor usa e continúa, compliendo su desfrenado apetito, este tal traspasa uno a uno...”; *Celestina* (pág. 11) に “Prosigue dando razones porque se mouio a acabar esta obra”; *Crónica General* (pág. 325) に “...et siguiolos mucho dandoles muchas penas” などの用例が存在することを付け加えておこう。

主たる参考文献

(註記にあげた文献、論文は省略する)

- Real Academia Española: *Gramática de la lengua española*, Madrid, 1931.
- _____ : *Esbozo de una nueva gramática de la lengua española*, Madrid, 1973.
- Alcina F., Juan y Blecua, J. Manuel: *Gramática española*, Barcelona, 1975.
- Alonso, Amado y Henríquez U., Pedro: *Gramática castellana*, Buenos Aires, 1960.
- Bello, Andrés y Cuervo, R. J.: *Gramática de la lengua castellana*, Buenos Aires, 1945.
- Bourciez, Édouard: *Éléments de Linguistique romane*, Paris, 1956.
- Fente G., Rafael y otros: *Perífrasis verbales*, Madrid, 1972.
- García de Diego, Vicente: *Gramática histórica española*, Madrid, 1966.
- Ford, J. D. M.: *Old Spanish Readings*, Boston, 1966.
- Hanssen, Federico: *Gramática histórica de la lengua castellana*, Paris, 1966.
- Keniston, Hayward: *The syntax of Castilian prose*, Chicago, 1955.
- Lamíquiz, Vidal: *Lingüística española*, Sevilla, 1975.
- Lightfoot, David W.: *Principles of Diachronic Syntax*, London, 1979.
- Lorenzo, Emilio: *El español de hoy, lengua en ebullición*, Madrid, 1966.
- Harris, Martin: *The evolution of French syntax, a comparative approach*, London, 1978.
- Marcos M., Francisco: *Aproximación a la gramática española*, Madrid, 1975.
- _____ : *Lingüística y lengua española*, Madrid, 1975.
- Martínez M. Amador, E.: *Diccionario gramatical*, Barcelona, 1953.
- Maurer Jr., TH. Enrique: *Gramática do latim vulgar*, Río de Janeiro, 1955.
- Unamuno, Miguel de: *Gramática y glosario del Poema del Cid*, Madrid, 1977.
- Real Academia Española: *Diccionario de la lengua española*, Madrid, 1972.
- Alonso, Martín: *Enciclopedia del idioma*, Madrid, 1955.
- Covarrubias, Sebastián de: *Tesoro de la lengua castellana o española*, Barcelona, 1943.
- Vox, *Diccionario general ilustrado de la lengua española*, Barcelona, 1973.